

1971年8月7日 第3種郵便物認可(毎月6回 1の日・6の日発行)
2020年12月5日発行 SSKA 増刊通巻第10391号

SSKA ああるぴい

JRPS三重会報第24号

—◇ はじめに ◇—

今年度はコロナで始まり、いろんな事業がやむをえず中止または延期されております。当協会の総会も書面総会としましたが2021年1月31日の新春交流会は、近藤先生と吉田先生をお招きして行う予定です。三重県網膜色素変性症協会は、コロナに負けずにいろいろな行事を9月から実施してきました。三重県の南勢にある遠隔地域の熊野市でMW10(暗所視眼鏡)、オーカムマイアイ 2(読み上げ機器)、エンジェルアイリーダー(読み上げ機器)を熊野在住の視覚障がい者の方に体験していただきました。11月14日、秋の交流会では亀山地域の歴史探訪を通じて皆さんとの親睦を深めました。11月23日には、伊勢神宮外宮前で強風のもとで役員と盲導犬一頭が募金活動を行いました。詳細についてはこの会報に記載させていただきましたので、ぜひご覧ください。

また、私たちの悲願であった再生医療の治験が行われました。これは私たちにとっても嬉しいことです。人生においても、何事も急に決まることもあれば、なかなか決まらないこともあります。あわてなくてもいつの間にか決まっていたり、ゆっくりでいいのに急に決まってしまうたりしてしまうこともあります。何事にも、その時その時で上手に対応をしていきたいものです。

*** 目 次 ***

2020年度医療講演会 & 新春交流会のご案内	3	ページ
SSピンポン体験教室に参加してみませんか	5	ページ
世界網膜の日イン滋賀 WEBによる開催	6	ページ
難病連熊野相談会に参加して	9	ページ
秋の交流会を終えて	9	ページ
JRPS三重の秋の野外交流会に参加して	10	ページ
みなさまの街頭募金へのご協力に感謝です！	12	ページ
闘い続けた日々	14	ページ
AI ロボットという視覚障がい者歩行誘導装置への期待	...	15	ページ
大好きなおばさん紹介	17	ページ
暗所視支援眼鏡 MW10Hikari 体験談	21	ページ
さようなら 我が家の盲導犬たち	23	ページ
念願の音声体温計を手にすることができました	24	ページ
来し方80年	25	ページ
編集後記	29	ページ

(目次終わり)



<お知らせ>

2020年度医療講演会 & 新春交流会のご案内

担当: 加藤 多・辻本 和仁

新型コロナウイルス感染拡大により、各行事や大会の縮小や中止が相次ぎ、思うように外出もできなかつた日々が続いた2020年度でした。会員の皆様におかれましては、毎日を頑張って過ごしてこられたのではないかと拝察いたします。

さて、新年恒例の交流会も新たに下記の通り実施させていただきます。今年度は、午前中に医療講演会を、午後は昼食をとりながら会員相互の交流とオークションを盛大に行いたいと思います。医療講演会は、総会時に実施される予定でしたが延期された講演会です。講師の吉田晶子先生にはご多忙の中、私たちに時間を作ってくださいました。今後私達が治療を受ける際に重要となる遺伝カウンセリングや遺伝子検査について、最新情報をお話していただければと思います。この機会に貴重な講演をお聞き逃しのないよう、ご家族そろってお誘いあわせの上是非お越しいただきたいと思います。

なお、感染拡大防止のため、消毒・マスク着用などご不便をおかけします。昼食はお弁当となりますが、お酒等は取り止めます。また、オークションではお持ち寄りいただいた品物を、元気に競り落としていただいで募金にご協力ください。

新しい年のスタートにふさわしい有意義な交流会にしましょう。

- 日時: 令和3年1月31日(日曜日) 10時45分から 15時00分
- 場所: 松阪市福社会館 3階 大会議室
- 日程:
 - 電車利用の方は、松阪駅南口JR側改札口に9時40分または10時00分集合。松阪駅から徒歩約20分で会場到着。
 - 10時30分～ 受付
 - 10時45分～ 開会の辞、会長新年挨拶、座長と講師紹介

○ 11時00分～ 医療講演会

座長： 近藤 峰夫先生(三重大学医学部眼科教室教授)

講師： 遺伝カウンセラー 吉田 晶子先生(神戸理化学研究

所)

演題：「網膜色素変性の遺伝カウンセリングと遺伝子検査」

○ 12時00分～ 質疑応答

(休憩と昼食準備)

○ 12時30分～ 昼食懇親会、自己紹介と歌など

○ 14時00分～ オークション

○ 15時00分 閉会 松阪駅まで誘導、解散

※ 午後のオークションは、自宅で使わない品物、家で眠っている品物、また寄付に協力される品物をご持参ください。

売上金はJRPS本部への寄付金とします。よろしくお願いします。

● 感染防止対策： 参加者全員に体温計測、名簿記入、手指消毒をお願いします。また、各自でマスクをご準備と着用をお願いします。

● 参加費： 会員は1,500円(昼食弁当とお茶代、その他諸費用)
なお付き添いは1,000円

● 申込み：1月15日(金曜日)までに地区担当役員までご連絡ください。各地区担当役員は下記のとおりです。

☆桑名・四日市地区

佐藤 好幸 090-4856-0683> yoshiyuki5110911@yahoo.co.jp

☆名張・亀山鈴鹿地区 ☆伊賀・名張地区

森沢 吉行 0595-64-3704 Y.Morizawa<mz.1q84@asint.jp

☆津地区

澤野 弘樹 080-5293-2181 gozilla555@outlook.jp>

☆松阪・多気一部・度会一部・尾鷲熊野地区

辻本 和仁 090-6765-5739 hzmqcXIV09@zd.ztv.ne.jp>

☆伊勢・多気一部・度会一部地区

加藤 多 090-1418-4996 masakato@topaz.ocn.ne.jp

☆伊勢・鳥羽・津一部地区・きらりの会

小川 正次 0599-43-2523 sanryoin@poplar.ocn.ne.jp

当日の問合せ先：辻本 090-6765-5739 加藤 090-1418-4996

● 集合時刻の①9時40分と②10時00分に連絡のよい電車は次の通りです。

・ 桑名、津方面から

① 急行 桑名発 8時22分、 津発 9時9分、
中川発 9時25分、 松阪着 9時31分

② 急行 桑名発 8時42分、 津発 9時24分、
松阪着 9時49分

・ 鵜方、鳥羽方面から

① 鵜方発 8時15分、 松阪着 9時24分

② 普通 鵜方発 8時43分、 特急 鳥羽発 9時20分
松阪着 9時46分

・ 名張方面から

① 急行 名張発 8時43分発、 松阪着 9時31分

② 特急 名張発 9時5分、 松阪着 9時40分

以上

<お知らせ>

SSピンポン体験教室に参加してみませんか

森澤 吉行

☆ 開催予定日 令和3年4月18日 時間・場所 未定

STT(サウンド・テーブル・テニス)は、視覚障がい者の方々が40年以上前から行われている卓球です。また、SSピンポンは、5年ほど前に三重県で考案されたアイマスクを付けないSTTで、ルールが少し緩和されて優しく考えられています。

少し説明しますと、一般の卓球台に相手コートと自分のコートにボールが飛び出さないための枠を付けます。ネットは、ボール(40mm)をくぐらせるだけの幅(42mm)です。音が出るボールを使って、卓球台の

上をアイスホッケーのように転がしながら打ち合う卓球競技です。どなたでも簡単にできます。単純なゲームですが、それでも視覚障がい者の成人男性が打ち合うゲームになれば時速150kmを超えるスピードになることもあります。

また、未経験の子供や年配者もすぐにゲームが始められるような競技です。三重県では、介護施設等でも行われており、STTのメンバーとボランティアとの交流に一役買っております。

また、四日市市・菰野町・鈴鹿市・津市・名張市・伊勢市などでメンバーが増えております。毎年100名ほどの大会も行われており、去年までは、ダブルス大会として行われていました。SSピンポンでのダブルスの場合、おじいちゃんと孫のペアで出場される方もいます。見ていておもしろいですよ！

今年もコロナ対策を十分にしたうえで、シングルの試合を2人1組として盛大に開催されました。来年は三重とこわか国体ですが、SSピンポンもデモスポーツ部門にエントリーして、県内各地で盛んに体験教室等を行っております。私も名張でSSピンポンを楽しんでおります。

そこでは、卓球経験50年の男性もいれば知的障害の女性、下肢障害の方、スポーツ未経験だった年配のボランティアの方など、多様な方々と毎週楽しく行っております。この際、共生社会を叫ばれる昨今、ぜひSSピンポンを体験していただきたいと願っております。

よろしく申し上げます。

なお、開催地・日時の詳細は後日連絡します。

世界網膜の日イン滋賀 WEBによる開催

小川 正次

今年度の世界網膜の日はインターネット上のWEBによる初めての試みでした。これも新型コロナウイルスによる3密を避けての必至の策でリモートアプリのズームでの開催となったわけです。

2020年度は世界網膜の日イン滋賀ということで、9月26日の13時より開催されました。世界網膜の日とは、昼と夜の時間が同じである9月23日に世界統一の記念日として制定されました。そこで、日本でもこの日に近い日程で、会場の都合も合わせ、西日本と東日本のどこかの県主催で持ち回りで実施されます。三重県も平成28年に鳥羽市で大会を引受け、数多くの皆様のご協力を得て成功裏に終了できました。

私も10年程連続で参加させてもらっております。初めて訪問した県もいくつかあり、新しい発見をしてきました。そこに参加された方々と出会い、たくさんの友人ができました。同病相励まし合いながら現在も続いております。

この大会がWEB開催となったのは初めてです。コロナ禍によって、いたる所でリモートアプリによるオンライン通信が採用されて、このシステムを導入することで、自宅にいても会議が行えることが可能となりました。したがって、今年の大会は我が家のパソコンの前にながら、会場に居るつもりで、講演等を真剣に聞かせていただきました。

その内容の概略を説明させていただきます。

「2020 マザーリークに 抱かれて 甦れ 希望の光 世界網膜の日イン滋賀」 2020年9月26日13時より16時30分までという画像のもとに始まりました。

まずはJRPS滋賀の会長の田中嘉代さんの歓迎の挨拶から始まりました。そして長沢理事長の挨拶があり、第24回研究助成授与式が始まりました。この助成金は、私たちの難病RPに対し、治療法研究をしてくださる先生方の中で、その研究レポートの厳密なる審査の結果、協会から推薦された先生方です。この先生方の紹介と学術理事の順天堂大学医学部眼科教授の村上先生より、受賞の講評をいただきました。その後、受賞された3名の先生方に研究発表をいただきました。

① 前田 忠郎(神戸市神戸アイセンター病院)【助成金200万円】

「iPS細胞由来網膜色素上皮細胞移植の実用化に向けた最適な製剤化条件の検討」

- ② 西田 健太郎(大阪大学大学院医学系研究科視覚機能形成学寄附講座)【助成金100万円】

「人工網膜の実用化に向けたトータルシステムの検証」

- ③ 小柳 俊人(九州大学眼科教室)【ライオンズ賞(助成金100万円)】

「定型網膜色素変性における包括的ミトコンドリア遺伝子変異解析」

それぞれの先生の研究発表がなされたのですが、専門語の多いことからなかなか理解しがたいものでしたが、何となく分かりました。

これらの発表はJRPS協会誌において掲載されています。

記念講演として、講師は高橋政代先生(株式会社ビジョン・ケア代表取締役 理化学研究所生命機能科学研究センター 網膜再生医療研究開発プロジェクト 客員主管研究員)からいつもの一般向けする優しい口調にて講演をいただきました。テーマは、網膜再生医療の動向」ということでした。内容は、再生網膜上皮の話、視細胞の再生の話、遺伝子診断の話、ロービジョンの話に分けたものでした。

医療は日々研究され、再生治療、遺伝子治療、人工網膜治療と私たちのためにたゆまぬ研究がなされています。今までは裸眼視力を中心に考えていたのですが、機械的な矯正視力であっても、生活に支障をきたす場合が減ることになります。そのために、視力や視野を補ってくれる機器として、オーカムマイアイ2のように文字や人物を読み取ってくれる画像認識装置や、暗い所でも明るく映すことの出来る暗所視支援眼鏡などもあり、視覚能力補助機器がある。ロービジョン克服における様々な機器をうまく使い分ければ、徐々に医療法確立に向かっている臨床治療と平行に、生活の質を向上していきましょう、とのお話しでした。

最後に、田中滋賀県網膜色素変性症協会会長から、次回開催県の岩手県網膜色素変性症協会の高橋会長にバトンが引き継がれました。次年度は遠方とはなりますが、都合がつけましたら9月26日の開催となる予定です。

難病連熊野相談会に参加して

佐藤 好幸

令和2年11月1日(日曜日)に三重県熊野市健康福祉センターで難病相談会が開かれました。

この相談会は、JRPS三重の会長河原さんが所長となっている三重県難病相談支援センターが主催するもので、毎年5回ほど各地域を相談会場として開催されています。

今年は熊野市を会場として開かれました。いつもは広い会議室などで、難病の種別ごとにブースを設け、JRPS三重の地区役員なども相談員として参加しています。ところが今年は、オーカムマイアイ2と暗所視支援眼鏡、エンジェルアイなど新しく機器が発売されたことを受けて、普段交流会などにも遠距離で参加しづらい熊野や尾鷲などの会員にも、今人気の新製品を体験していただこうと計画しました。県職員や難病連の役員と一緒にバスに乗り、私たちの役員も松阪から参加しました。自動車専用道路の完成によって松阪から2時間余りで熊野に到着でき、本当に近く感じました。

今年は広い会議室以外に眼病患者相談室を設け、午後1時から3時までの2時間の相談会を開きました。会場には網膜色素変性症のほか、緑内症やベーチェット病などのみなさんもとぎれることなく多数ご来場いただきました。それぞれ病名や症状はことなるとはいえ、生活の質の向上のお話や、新ロービジョン機器をそれぞれ満足できるまで体験していただいて成功裏に相談会を終えることができました。

ご協力いただいた皆様、またご来場の皆様ありがとうございました。

秋の交流会を終えて

澤野 弘樹

11月14日、秋の野外交流会で亀山市を散策しました。

天候にも恵まれ、会員・付き添いの方総勢34名で執り行われました。

亀山市は歴史深き場所です。当日語り部の方にお問い合わせをしておりましたが都合が悪く、資料と佐藤ご夫妻による案内で、亀山駅からお城庭園、加藤家長屋門(武家屋敷跡)、館家住宅、飯沼惣齊生家跡をまわりました。緩やかな坂道が続きましたが歴史に由緒ある町並みで散策も楽しくできたかと思えます。

午後からは亀山市歴史博物館を見学。ここでは2班に別れ、学芸員さんに付き添ってご解説をいただきました。1階ではヤマトタケル企画展を開催。こちらは、12月13日までとのことです。

2階では、縄文時代から現代に至るまでの、亀山市出土の土器や生活道具等が展示されておりました。亀山市にはあまり訪れることもありませんでしたので、歴史に触れる資料に満足しました。

また、亀山市の地図を見ると他にも散策出来る場所が多くあり、今度はゆっくりと訪れてみたいと思いました。

本年はコロナの影響でこのように集まる機会がありませんでしたが、久しぶりに多人数で集まれたことは嬉しく思いました。来年の新春交流会も盛大に開催できるよう祈っております。

JRPS三重の秋の野外交流会に参加して

森田 君子

11月14日、JRPS三重の、秋の野外交流会に参加しました。

一時期はコロナ感染に怯えていた娘達も、「出かけることはよいことやなあ」と喜んで送り出してくれました。それというのも、日本中が、コロナ感染に怯え、春の長雨に耐え、酷暑の夏を何とか乗り越え、今年も残り2か月になったのに、まだコロナの終息も見えず、せつかくの行楽日和が続いても相変わらずの我慢が続いています。

でもマスクと消毒さえ守れば、健康のためのウォーキングは誰もが許してもらえるのではないかと信じました。

私は春からの閉じこもり生活で、めっきり足が弱っていて、外出が億劫になり、週2回の買い物すらやっとだったのです。

足を鍛えるために、友達に教えてもらった(ナイスデイ)で朝晩足踏みをし始めたのが9月の頃だったでしょうか。

こんな私が、亀山を歩くことを決意したのも、朝晩足踏みを繰り返した結果が出ると密かに期待してのことでした。

海沿いの町に比べたら寒いだろうとやや厚着をして、朝早い近鉄電車に乗り、何度か乗換えてJRの亀山駅に着きました。とにかく足がふらつかないように、慣れないJRの昇降口では特に気を遣いましたが、いつか心は軽いうきうきと、精一杯背筋と足を伸ばし歩いて行きました。

暑くも寒くもない、理想的な小春日和でした。

初めて訪れたとは思えない見慣れたような光景は、幼いときの実家を思い出すようでした。辺りの情景を教えてもらいながら、たまに吹いてくる山風が心地よく、マスクのうっとうしさも忘れて、前の人と離れ気味に追って歩きました。真っ赤に紅葉したもみじや大小の枯れ葉を踏みしめたり、蹴飛ばしたりしながら、いつの間にか長屋門前に立っていました。

以前から読書といえば、時代小説の好きな私、想像を巡らしながらの探索でした。実際にあるがまま保存されているこのお屋敷で、そんなお座敷の縁先に立てば、今にも羽織袴で腰に二刀をさした、小柄なお侍が出てきてくれそうな、そんな縁側らしき敷居に腰掛けてみました。

床下丈はやはり低かったです。長屋門、玄関、馬小屋、男衆の部屋、そしてトイレもあったようです。手水という所のトイレは実際使わせてもらえたと聞きました。そして、客間らしい部屋には真新しい障子戸もはめてあり、常時保存に力を入れておられることの苦勞も感じました。

裏庭には普段はもっと枯れ葉が降り積もっているはず、思いの他きれいでした。やはり係の人のご苦勞を感じました。その庭は、狭い所で段が多く、踏み上ったり下りたり、跨いだりを繰り返したわりには、疲れも感じず楽しみながら隅々まで見せてもらいました。

垣根でしょうか、外側にはサザンカが咲き誇り、花といえば触らずに
いられない私、触らせてと頼み、そっとふれて思わずため息、八重咲き
の小ぶりの優しい花でした。そこだけは時代を感じられなくて、今風だ
なあと思いました。

なだらかな坂を上り下り、昼食の後は交流会でした。参加者の皆さ
んの声も懐かしく、とにかく明るい人が多くて嬉しかったです。

その後、歴史資料館に行きました。昔の道具や土器の説明をしても
らったり、スロープとエレベーターの移動で、ヤマトタケルの巫女である
音橘ノ姫の話聞かせてもらいましたが、離れて聞いたので内容は分
かりませんでした。いろいろな道具は私も興味深く聞きました。とにかく
不自由な私たちには、移動し易い資料館でした。

駅までの帰り道、ペアのKさんと呼吸もぴったりで、歩幅も合わせ走
るように軽快に歩けました。私にこんなスタミナがあったのか自分でも
びっくり、この年齢からでも体力の復活が出来るのだと感激でした。そ
れに足踏みの鍛錬の結果には大満足で、連れて行ってくれた皆様に
感謝感謝です。

あとで思ったことですが、やはりどの駅も電車も私たちのグループ以
外お客は少なく、寂しく思いました。朝7時10分に家を出て、わが家
に帰宅した頃には、秋の短い1日、午後6時頃だというのに、もう真っ
暗でした。

みなさまの街頭募金へのご協力に感謝です！

辻本 和仁

「これは入れていかなあかんわ！」と言いながら募金をしてくれた
男性。その奥様であろう女性もバッグの中からお金を探して募金箱に。
それはまだ私の妻が長机の上に募金箱とポケットティッシュを入れた
かごを並べている最中で、集合した役員への河原会長からの「では、
これから募金活動よろしく」の掛け声が出される前の出来事でした。

このような印象的なシーンから始まった今年で4回目となるJRPS三重の街頭募金活動は、11月23日月曜日の勤労感謝の日に、伊勢神宮外宮前広場で行われました。

河原会長や小川副会長他、役員5名とその家族やヘルパーさんと盲導犬1頭が参加しました。今年は特に、コロナ感染防止の観点から、募金箱は首から下げずに長机の上に置く、お礼のポケットティッシュは手渡さずにこれも長机の上に置く、そしてその机から1.5m以上離れて立つ、全員が各自フェイスシールドとマスクを着け、アルコール消毒をこまめにする、ハンドマイク等を使い訴えの声が届くようにするなどの対策をして臨みました。

私たちは机から離れて立っているのも、募金を入れてもらったときやポケットティッシュを取ってもらいたいときは、後ろから見ていてくれる家族やヘルパーさんがその都度声掛けをしてくれるなど、チームワークもバッチリです。

天気は曇りがちで風も少し強めの日だったので、募金箱やティッシュの籠が飛ばされないように、梱包用の透明テープで机に固定もしましたが、風のおかげで本部から送っていただいたJRPSのノボリ旗が、勢いよく旗めいてくれました。

JRPS三重の黄色いビブスを身に着けた各役員は、「募金にご協力お願いしまーす」とか、「治療法確立のためにご支援お願いしまーす」などとそれぞれに声を出します。例年より心なしか人通りは少なめの様子でしたが、「頑張ってください」と声をかけてくれたり、若い人であっても協力してくれた人も多かったり、お札を入れてくれる人も予想以上にあたりました。

募金活動は、昼食をはさんで交代しながら午前10から午後2時まで行いました。募金総額は45,000円を超えるものとなりました。

募金活動を終える度に毎回感じることは、ご支援ご協力をいただいた大勢のみなさんへの感謝です。嬉しさとありがたさと、これからも頑張ろうという気持ちでいっぱいになります。それが何か今年はより一層を強く感じられたように思います。そして、活動に参加した一人ひとりに

も、私が冒頭に書いたような印象的なエピソードがそれぞれあったのではないかと思います。それはまた今後の機会に紹介していただく楽しみということにしましょう。

闘い続けた日々

浅原 悦子

主人の膀胱に影があります。すぐに大きい病院に行ってください、と言われ、驚いた私と主人です。いろいろ検査したところ、ガンが見つかり、耽々と事が運ばれ、入院手術となり、あっという間に時間が進みました。

その時のことは私、あまり覚えていません。

段取りを進めながら半ば放心状態になっている私の代わりに、娘達が入院手続き等をしてくれたことに今も感謝しています。その後入院・退院とこれまでに何度も何度も繰り返していました。

髪の毛が抜け、主人の頭髪はツルツルになりました。その他に副作用で手足がしびれ、歩くことが困難になり、10か月で抗がん剤もやめることとなりました。

ガンも大きくも小さくもならず、免疫療法と放射線療法に変えました。それが良かったのか分かりませんが、今では、ほとんど今までの検出されていたステージ5の癌反応も無くなり、元気になりました。でもまだ、手足のしびれは残っております。

この私が覚悟した3年前のことは娘たちの笑い話です。髪の毛が抜け落ちて頭皮はピカピカになっていて、帽子を絶えずかぶっていたことが思い出として、二人で大笑いしております。

少しずつ体調も良くなってきて、昔の状態に戻ってきたことを喜んでいきます。

この治療にお力をいただいたお医者さまや看護師さんに感謝しています。

現在、病魔と闘っておられる皆様へ。

「希望を捨てないで下さい。きっと良くなります。信じましょう、良くなることを。」

AI ロボットという視覚障がい者歩行誘導装置への期待

内田 順朗

1. はじめに

全盲の私が盲導犬と歩くようになって早くも20年近くになる。個人が自由に外出できるということは社会参加の一つの大きな要素である。外出の際に視覚障がい者を安全かつ快適に、歩行を補助する役割を持つのが盲導犬である。もちろん動物愛護の精神を欠いて、単なる歩くためのツールとして意識することは許されない。また、盲導犬を使用するについては一定の技術を必要とするし、それを維持するための費用を負担しなければならない。それはある意味では煩わしさであり、重荷でもある。にもかかわらず視覚障がい者が単独で自由に外出できるということは代えがたい大きな喜びでもある。

2. 最近のAI技術について

ところで、最近「AI技術」ということを耳にすることが多くなった。11月11日のNHKラジオの「中国における自動運転」の解説では、「5G（ファイブジー）」という高速大容量通信ネットワークのもとで、いわゆる出前の自動走行ロボットによる無人配送が実現していると伝えている。また、日本国内では11月12日の報道で、AI（人工知能）を活用して視覚障がい者の自立移動を支援する「AI スーツケース」の実証実験を開始とのことである。また、国内ですでに実用化されている装置として、無人の配送ロボットの例もあると聴く。

このような最近のAI技術を応用した話題を耳にすると、いわゆる盲動ロボットの実現の夢はそれほど遠くないところに来ているように思うのである。

3. 私のイメージする盲動ロボット

上記のようなニュースを聴くにつけ、盲導犬を使用してきた私には次のようなロボットがイメージされる。

ロボットと言っても人型である必要はない。動力で自走する箱形でよい。カメラや各種先端技術のセンサーを持ち、人の歩ける所なら安全に人の歩行速度で移動する。

視覚障がい者はその装置の半歩後ろで、装置から出ているハンドルを持つ。もう一方の手では一応白杖を携帯する。装置の大きさと重さは、航空機の客室に持ち込むことのできる範囲とする。またその範囲内でスーツケースのように上部ロッカーに収納できるようにする。このような大きさであれば、階段では手で持ち上げて移動することもできる。

以上のような私のイメージである。

4. 盲導犬ユーザーとして考えてきたこと

近年スマートフォンが普及し視覚障がい者でもそれなりに取り扱えるようになってきた。また、そのコンパクトな装置の中に高度な機能が凝縮されている。視覚障がい者が外出時に必要とする安全情報、つまり地図情報・交差点の信号機の情報・鉄道駅や大型施設内での案内情報などの提供はいずれ可能となるであろう。そうすれば上記のようなかさばる装置は一見必要でないように思われるであろう。

しかしながら、スマートフォンやその他の身体に付ける感覚装置では一つ大きな落とし穴があるように思う。

スマートフォンのような装置からそれを使用する視覚障がい者に対して様々な環境情報を伝える方法としては、基本的には音声とか触覚に訴えるしかない。歩くための情報としていくら正確で、時を得たものを伝えることができるとしても、受ける方の人間がそのすべての情報を正しく認識して安全な行動をとるという保障はない。それが私の見解である。

5. 盲導犬の一つの大きな役割

盲導犬は基本的には衝突をせず転落をしないように歩くことができる。使用者の命令には従順に従う。しかしながらその命令通りに歩くと衝突や転落に繋がると犬そのものが判断する場合は、命令に反してその場に留まり、危険を回避するという大きな役割がある。それでこそ使用者の安全が保たれるのである。

このようなはたらきをAIに求めるとすればやはり物理的に人の歩みを制御する機能が必要である。

6. 結びに

上記に私がイメージした盲動ロボットは、視覚障がい者の歩行には一見お荷物のようなものであるが、止まるべき所ではきちんと停止し、方向を転換すべき所では正しい方向へ進んでくれる。ハンドルに手を添えていさえすればそれほど感覚を集中していなくても安全に歩くことができると予想するものである。

このような装置の屋内での実現はそれほど遠くないように思われる。一般街路での実用化はやはりGPSの精度の問題と道路面の凸凹に耐えられる自走性能にかかってくる。今後の動きに期待しつつ、実現まで歩く力が衰えないようにしたいものである。

大好きなおばさん紹介

小川 明美

大正15年、寅年生まれ、現在94才になる渡辺千代子さんという叔母は私の父親の弟嫁です。後縦靱帯骨化症(こうじゅうじんたいこっかしょう)という難病に悩まされ、痛みと不自由な体と戦いながらも私の目を気遣い励まし続けてくれています。

このおばさん、私がすごーい！と思うところは、「おいしいものを食べるために生きてるのだから、おいしいものを送ってね！」と言えることです。

自分が難病で苦しんでることも、高齢になって不自由さも一段と厳しくなっているのに、つらさ・痛みなどをあまり訴えようとしません。

叔母が言うには、誰も痛いとか苦しい・辛いというようなことを話しても喜んで聞いてくれる人はいないだろうと言うのです。

78歳の時にこの難病の手術を受けたのですが、アメリカ帰りのお医者さんが、「このような難しい手術を成功させたのだから、せめて3年頑張ってください」と言われたそうです。それに対して叔母は、「あら？ 先生！ 3年でいいんですか？ 私30年頑張ろうとしてるのに・・・」と言い、先生を啞然とさせたようでした。

その後も、顕微鏡を使っての細かな手術を成功させた先生がリハビリ室へ来てくれたとき、豆を右の皿から左の皿へ箸でつまんで移し替えるところだったので、先生にも試してもらったそうです。その先生が箸をうまく使えず豆を移せなかったので馬鹿にしてやったよ！、と笑っていました。

先生も叔母の術後を気遣って診察の時にはいつも声をかけてくれていたそうです。入院時に「何か食べたいものあるか？」と尋ねられ、「おにぎり」と応えたら、先生が作って持ってきてくれたことがあったと、嬉しそうに話してくれました。

また、先生が、「渡辺さん、今何かしたいことあるか？」と尋ねられたとき、「先生とデートしたい！」と伝えたら、先生は、「いつでもいいよ。ベットを空けておいてやるよ！」と言われたそうです。でも、叔母は、先生の招きを受け入れると、入院させられ退院させてもらえなくなると思い、丁重にご辞退したと言ってました。何度となく入退院を繰り返しながらも今は通院しているようです。

腹水を4リットルから7リットルぐらい、何度となく抜いてもらっているようです。はじめの頃は1か月に2度ぐらい、今は月に1度か2か月に1度となってきたそうです。昔なら腹水がたまってきたらご臨終の前だったのにと、医学の進歩を喜んでいるかいないかは別としても、生かされていると言ってました。この腹水を抜くために婦人科へ行くのですって。

「今から男の子を産みたいから婦人科へ通院してる」と、私を笑わせてくれます。94歳になってもこのようにトンチの効いた話を聞かせる叔母が、ときどき泣き言も言います。

「痛くて痛くて動けないときがあるんだよ。3日間じっと固まっていて、4日目は痛みを負けないように闘うんだよ」と言います。一人でトイレへ行けなくなったら施設へ行かなきゃならないと考えているようです。今は頑張ってるのじゃなく「闘ってる！」と言います。頑張るには力が不足しているそうです。足も体も、手も指も自由に動かないのに携帯メールを書いてくれます。手を握り、握ったこぶしの先で携帯のボタンを押すのだそうですが、なかなかうまくいかないときもあり失敗も多いと言います。

私が「おばさん すごーい！ かしこいね！」とほめると、「私、女学校卒業だもん」と言いますが、すぐに「戦時中だったので勉強なんか出来なかったよ。勤労奉仕にばかり引っ張り出されていたんだよ」と言います。そんなおばさんにいつも励まされています。

先日、ここ志摩の海で泳ぎ回っていた大きな伊勢エビ2匹で1キロの品物を送りました。「元気な海老が泳いできたよ！」と受けとってくれました。

「まずは伊勢エビの刺身でよばれ、刺身を細かく叩いてもらってご飯に載せて食べ、海老の足などから取り出した細かなもので天ぷらにもしてもらい食べたよ！ それから海老の味噌汁、オジヤにもしてもらったらそれが一番おいしかった」と喜んでくれました。このように私から届けた品物をいかにおいしく食べたかを報告してくれる叔母です。

叔母と共に暮らしてくれている娘夫婦のおかげで、叔母はわがまま一杯過ごしているように話しますが、叔母の話を聞いていると元気になれる私です。娘夫婦が娘婿の母親の具合が悪くなり留守にしたとき、「お母さんも福祉施設の体験・見学をしてきたらいいよ！」と言われ、1週間ぐらい入所したことがあったそうです。その時、施設内では男の介護士にトイレ介助もしてもらったそうです。家ではたとえ 1 時間かけてでも一人でトイレへ行っていたのに、「危ない」と言われ自由にトイレへ

行かせてもらえなかったとも言っていました。それが一週間も続くと帰宅したとき、一人でトイレへ行くのに不安を感じるようになってしまったとも言っていました。

食事の時も、テーブルには色鮮やかな白のかぶら・赤のにんじん・緑の青菜が配置されていましたが、施設の誰もが「いただきます」の挨拶も「ご馳走さま」「ありがとう」という声も発しないのだそうです。

そこで叔母は、「あら！ おいしそう！ いただきまあーす」と大きな声を出し、皆にも言うように促していたそうです。5日ほどぐらい経ってから、2人、3人と唱和してくれるようになったそうですが、叔母が退所してからのことはわからないと言っていました。「悪いけど、色はきれいだけども味が無かったよ！ おいしくなかったなあ」と言っていました。

叔母がまだ一人歩きが出来ていた頃、モデル歩きをしていたとき、腰の曲がった人がカルテを出しに行ってくれたり、タクシーの乗り降りの時に守衛さんがお姫様抱っこしてくれたとか・・・病院内の出来事もおもしろおかしく聞かせてくれるのです。モデル歩きって知ってますか？ 足が曲がらないのでそっと滑らすように動かすのだそうです。頭に本を乗せていたらきっと落とさないだろうとも言っていました。でも、頭に何かを乗せるなんてとんでもない！ 首に柔らかなマフラーを巻くだけでも激痛なんですって。だから、着るものは古くなった柔らかなもので手術した首に当たらないように延びきったものを着るのだとか・・・

娘と同じぐらいの年齢の同じ難病の人から「渡辺さんの娘にして！」と頼まれたことがあったそうですが、叔母は女の子が4人もいるので、もう娘はいらないと言って断ったそうです。その人にもなつかれ、あれこれ電話やメール交換をしていたようです。その人には、叔母には私のような見えない姪がいて、自分よりももっともつらい・悲しい立場の人がいることを教えてくれていたようです。

私の痛みのないこの目の病気は、目を閉じて寝てしまえば周りの健康な人たちと同じになれます。暗いところでも明るいし、暗い世界ではありません。見えなくなってしまった今は、ヘルパーさんやボランティアさん、福祉の人たち、近所の人や身内の人たちの気遣いを受けながら

暮らしています。見えなくなりつつある時のことを思えば、今視力0、光覚のみになってしまった現在の方が断然幸せです。見えなくなりつつある頃の不安や不便さから解消され、周りの人たちから助けてもらいながら自分のわがままを通してもらい、行きたい所へ連れて行ってもらったり参加させてもらってます。なのに、この年齢のせいかわかりませんが聞こえにくい・聞こえないときが多々あり、見えない・聞こえないとなってしまうたらどうなるのだろうと不安な気持ちになることがあります。

この先案ずるよりも今が幸せ！と思えるこの気持ちを、いついつまでも持ち続けたいと思ってます。

暗所視支援眼鏡 MW10Hikari 体験談

加藤 多

松阪市視覚障害者協会に属する私は、当協会が代理店となっている株式会社HOYA(ホヤ)の暗所視支援眼鏡である MW10 Hikari を購入した。この眼鏡のコンセプトは、暗所における明度上昇と可視領域を拡大することを目的とするもので、弱視で悩む視覚障がい者にとってすばらしい支援機器である。

この機器を松阪市の便利視覚支援機器体験会で経験することで、購入を決めた。定価は40万円という高価であったが福祉機器の補助を受けられることで手に入れることができた。その機能や便利性、その満足度についてここに記したいと思う。

さて、私はというと網膜色素変性症の発症から20年以上が経過したものの、右目の視野はほとんど見えないが、左目の視野は中心部のみが5%程度残っている弱視状態である。普段は眼鏡により強制的に0.5程度まで見る事ができるが、周辺部の視界が見えているようで本当は認識されていない状況である。そのために足元の障害物や人物(子供、犬等)に気づくことが少なく、ぶつかったり蹴飛ばしたりすることが多い。体は脊髄間狭窄の影響か腰痛からくる足の痺れなどが

あり、歩行する時、動きがよくない。さらに、夕刻以降の薄暗い道などは、ほとんど夜盲となる。懐中電灯を照らしてもその光の中心部しか分からず、遠近感もつかめないのが溝や縁石で転ぶことが多い。夜間外出は、決して一人歩きはできない。

こんな私がある時、趣味のビデオ撮影をしている時に、わずかな光しかない暗闇で眼には見えないのに、カメラレンズを通せば明るく物が映る現象にひらめきを覚えた。カメラやビデオ機器で光量不足や遠近感覚を増幅する技術があれば、眼鏡にそれを応用できればいいのに、と考えたことがあった。その希望にかなうような眼鏡がこの MW10 Hikari であった。まさに夢が実現したような眼鏡が開発されたのである。

この眼鏡の特徴はすでに述べた通り、明るさの増幅と狭い視野を拡張することができるのである。とは言っても、眼鏡内部すべてがそうなるわけではない。眼鏡の中央にある小さなレンズを通して、個々に違う可能視野に映像部分を調節し眼鏡レンズの真ん中に四角いスクリーンを映し出す。その画面で明度を調節し視界を広げたりして周囲を確認するシステムである。明暗を見やすい明るさに調節し、視野をある程度まで拡張(ズーム)する機能である。夕刻や夜間での暗さで昼間のような明るさで周囲が見渡せ、視野を拡大すると自分の足先まで確認できる。ちょうどビデオカメラの撮影のような感覚で視認できる代物である。夢の第1号機としてはかなり進んだ技術の結果と言える。

しかしその反面、不満な面も現れている。まず、バッテリーの時間が5時間しか持たない割にバッテリーが大きく、肩から下げて持ち歩くには結構重く感じる。また、充電時間は90分ほどでフル充電可能であるが、100V電源コンセントが必要である。また、1時間ほど着用して暗所やテレビを見ると、眼が極端に疲れる。長時間使用すると、眼精疲労から頭痛を起こす。普段狭い視野でしか見えていない眼を強制的に見えるようにしているわけですから、脳もびっくりして情報過多から拒絶反応を起こすのではないかと、とも思う。

また、レンズには標準用と広角用の2種類があるが、交換には見えにくい者には時間がかかる。など、まだまだ改良してもらいたい点が多いと

思う。開発会社にはさらなる改良とプログラムの Version Up を期待するものである。

購入してからの夜間外出は、コロナ感染拡大でほとんどない状況で、実体験が少ない。今後アイパートナーと相談して、歩行練習の機会をつくって慣れていかないといけない。白杖の歩行訓練に交じって練習を積み重ねたい。

さようなら 我が家の盲導犬たち

木村 靖子

私は生涯に3頭の盲導犬に恵まれました。

1頭目はパティー、2頭目はテンダー、3頭目はメモリーという名前の子たちでした。

それぞれ個性が違い、思い出すと様々な出来事が浮かんできます。

1頭目のパティーは雌のホツソリした白い犬でした。家庭の事情で訓練は夏休み中に受けたのでした。暑い中での歩行訓練は大変で、終了後は気の毒なほど地面に伏せて「ハーハー」いっていました。歩くのが下手な私を迷惑だと思っていたことでしょう。家庭に帰ってからは小さかった孫たちとも遊んでくれたし、小便をしたいときは「ピーピー」と鼻を鳴らして教えてくれる楽な子でした。恐がり雷が鳴り出すと「ワンワン」と鳴いて私を呼ぶので、夜中でも抱っこをしてやらねばなりません。このパティーとの別れが一番辛かったです。口の中にできる扁平癌で、3回も手術をしても再発して、我が家では看病仕切れず訓練センターへお任せしました。ハーネスを着けてとせがむパティーから、盲導犬引退のため家を去る引退式で、最後のハーネスをはずすときには涙がこぼれてきて我慢するのに必死でした。家を去って10日も経っても白い毛がどこからともなく落ちてきて、涙を新たに流したものでした。

2頭目のテンダーとの訓練は12月で、80年ぶりの大雪の中での訓練でした。雪のために白線や点字ブロックが隠されているので、曲がり角や交差点が判らないので苦労しました。テンダーは真黒な男の子。

歩くのは上手でしたが、他の動物に興味を引かれて走り出すので、何度も転ばされました。唯一外国旅行(ハワイ)をしたのが大きな思い出です。別れはあっけなく、満10歳に訓練センターへ連れて行って、さようならです。その足で3頭目の訓練に入ったのでした。

3頭目のメモリーの訓練も真冬のこれは1月でした。メモリーは一番小柄でおとなしい雌で、8年近く一緒に暮らしたのに、一度も「ワン」と鳴いたことがありませんでした。我慢強い子でした、意思を表す時は、水が欲しい時には水道の方を見て口をパクパクさせるくらいで、うれしいときにはジャンプして「キーキー」と喉を鳴らすくらいでした。顔も可愛くて、盲導犬を終了したら愛犬として最後まで暮らそうと思っていました。ところが、元気で通っていた私が病気になってしまい、メモリーの散歩はおろか、排尿・排便の始末にも支障が出るようになったし、家族も大きな病気になってしまって手助けが期待できなくなったので、しかたなく盲導犬を5か月早く引退させて、お別れすることになってしまいました。幸運だったのは、メモリーが小さいとき1歳まで面倒を見て貰っていたパピーウォーカーさんが引き取ってくれたことです。2, 3日もしないうちに思い出したのか慣れたそうです。50代の家族と元気に散歩している姿を想い浮かべると、メモリーは私というより幸せなんだろうと寂しさが薄れます。

3頭の盲導犬たちよ。楽しい思い出を沢山残してくれてありがとう。時々思い出をたぐっては懐かしんでいます。丈夫な足腰も3頭の盲導犬との散歩で得られたものと感謝して余生を過ごしたいと思っています。

念願の音声体温計を手にすることができました

佐藤 好幸

体温の上昇は血液の流れを活発化し 侵入したウイルスや細菌への免疫力を高めるとかで、大事な仕組みらしいですね。

そんなことで体調が悪いと、病気ではないかとまず体温を測ります。

視覚障がい者には音声体温計をと桑名市に要望していましたが、家族に晴眼者がいない世帯だけへの補助とのことで、何か事情があれば その都度お聴きします、との長年の繰り返しでなかなか進展が見られませんでした。

このコロナ禍で、体温測定がいろいろな場所で求められています。そこで、市役所へ晴眼者がいても支給してほしいとお願いしたところ、「そうですね」と前向きの話となり、協会会員みんなで要望の電話を掛けました。しばらくすると、音声体温計とカラートークは、晴眼者のいないにかかわらず補助対象とするということになりました。

音声体温計は品薄の状態で入荷はいつになるか分からないとのお話でした。しかし、しばらくすると、予想外の入荷があったとのことで、早速注文し念願の音声体温計を手にすることができました。

そこで、家庭用体温計と音声体温計を測り比べると、音声体温計はいつも0.3度から0.7度も低いのです。ヘルパーさんの体温計の比較でも同様な結果でした。そこで、「お客様センター」に電話をすると、体温計の精度は±0.1度で全商品検査をしているとのことでした。しかし予測体温計と実測体温計の違いではないでしょうかとのことで、なかなか埒があきません。その後再度電話をして、やっと商品交換してもらったことになりました。

しかし、到着した新しい音声体温計も大同小異でした。どの体温計を信頼してよいのか、よくわからなくなってしまいました。

来し方80年

宮本 忠

昨年夏、三重大学の卒業生から電話が入った。

「先生、傘寿をお迎えですね。おめでとうございます。出身ゼミ生で祝賀会をもちたいのですが…」、「えっ、数年前に喜寿の会をもってくれたばかりなのに、それに新型コロナウイルス問題も無視できないよ」と話し合っている最中に、私に「秋の叙勲 瑞宝中綬章」をくださるとい

う連絡が三重大学及び文部省からあった。そしてその連絡には「11月3日の正式叙勲発表まで内密にされるように」という忠告が付与されていた。これが外に漏れると、何かと周辺が騒がしくなるというのである。何が何だか分からぬままに当日が過ぎて、叙勲後10日も過ぎたのにいまだに祝電などが届く。

本日は、私たちJRPS三重の恒例イベント秋の交流会の日。叙勲について今日まで頭の中の整理ができぬまま交流会の日がやってきた。朝10時過ぎ、交流会の参加者約30名が亀山駅前の広場に集まった。久しぶりの出会いなのでにぎやかである。

優しい日光の「小春日和」といいたいところだが、少し強い冷たい風が気にかかる。しかし雨はなかろう、と推測。予想どおりイベントの最中には、雨はなかった。

亀山は人口5万ほどの山の緑豊かな町である。市である。亀山駅は、かつては国有鉄道であったが、1987年(昭和62年)にJRに民営化された。その結果、亀山以东がJR東海、亀山以西がJR西日本の路線になった。関西本線の起点は名古屋駅、終点はJR西日本の難波駅である。また、紀勢本線は、亀山駅が起点で終点は和歌山市駅である。そして亀山～新宮間はJR東海、新宮～和歌山市間はJR西日本の管轄で、新宮駅が境界駅となっている。初めての僕には、とても複雑でややこしい感じがする。

「10時15分 亀山駅 改札口集合」という計画どおり参加者のほとんどが亀山駅前に結集した。予定コースや昼食、トイレのことなどの案内などが幹事役員さんによってなされた後、11時前歩道を歩き出した。駅前車道に車数は多くない。歩道にも人影は殆どない。静かな風情。聞くとところによれば、佐藤さん・澤野さん二人が二度現場を予め訪ねて計画を具体化してくれた。途中坂道もあるので希望があればタクシーも利用できるとのこと。僕も含めてみなさん白杖を巧みに操って頑張って歩いた。亀山藩家老の建物を横目で通過し、次いで旧加藤家住宅内を、つまづかぬようにゆっくり移動した。呉服商の橋氏旧家では庭園もなかなか立派と感じた。

昼食は各自用意ということで、駅近くの店で買った人もいたらしい。場所は亀山市青少年研修センター。食事後、会員各自の近況報告や意見交換、「JRPS三重の歌」の合唱、そして募金運動などがあった。

午後 1 時過ぎに亀山市博物館(企画展:ヤマトタケル-その愛と死)を学芸員ガイド付きで勉強。ひとときの歴史ロマンを感じた。

博物館を見学後は、30分ほどで亀山駅に個々に楽しみながらで遊歩した。途中、「足腰強いですね」と声がかかった。時には「顔が光っています。皺がないですね」。若いときにはこういう掛け言葉は無かった。それだけ年輪を重ねた、ということだろう。

最近、自分の顔を鏡で見ることはないが、おそらくみなさんの言われることは当たっていると思う。それならば何故そう言われるのか、と考える。結論は、子供の時の暮らしかたにあるのではないか。小学生の5年頃から中学高校のお兄さんたちの中に入れてもらって野球やソフトボールをしていた。夏には片道1里(約4km)もある気比の松原海水浴場に連れて行ってもらって海水浴に興じた。その当時、まだマイカー時代でなかったので、往復10kmを平気で歩いたのだった。冬は近くの山道でスキー。その頃は、福井県敦賀には屋根まで雪が降ったのである。村立栗野中学校に入学すると直ちに野球部に入った。生徒会長を仰せつかっていたが、野球部担当の理科の先生は、僕にキャプテンを命じた。当時、栗野中学校は福井県の理科教育の当番校だった。監督はその準備に忙しそうであった。野球部の指導はほとんどなかった。

僕は町の本屋で野球の本を買ってきて勉強した。そして夕方薄暗くなるまで白球を追った。たまには敦賀高校野球部の栗中の先輩がコーチしてくれた。しかし敦賀市の最大の中学校と練習試合をしてもいつも10点以上の大差で敗北。彼らには後援会があり、ピカピカの靴を買ってもらっていた。僕らのスパイク靴はズックで、破れていなければ卒業していった先輩の汗にまみれた古い靴をありがたく履いた。

ところが、敦賀地区中学校野球大会で、何といつも大敗している町の中学と決勝戦にあたり、勝利したのである。優勝戦には、校長先生を先頭に全校の生徒が応援に駆けつけてくれた。卒業近くになると、

県立敦賀高校の野球部後援会の人が父親のところに何度もきて、息子を敦賀高校野球部に入るようにすすめるのであった。僕が生返事をしていたがついに父は僕に「どうする」と決断を迫った。「将来の行く道は自分で決めよ」と。僕ははっきり言った。「高校に合格しても野球部には入部するつもりはない。後援会のおじさんにきっぱり断ってよ」。父は一言もなぐなぐしなかった。敦賀高校は僕の在学中、2度甲子園に出場している。その主将は、明治大学野球部キャプテン、阪神タイガースの将来の監督候補のT君だった。45歳半ばに病気のために天に召された。合掌。

亀山駅到着後、由紀さんによれば「今日は1万歩以上歩いている」帰宅後二日ほど「太もも」に軽い違和感があったが、今はもとに戻り、日常生活には問題ない。市役所の高齢者のための身体検査では、担当医師が「悪い所は何もありません。この年齢では異常です」、僕は「先生、異常は悪いという意味ですか」と尋ねたら、「ほとんどの人がこの年齢では通常は何らかの問題があるものです。すみません、悪い意味の異常ではなく、良い意味での“異常”なんです」。

傘寿は数え年で80歳の祝い。「さん」という字は、「傘」という漢字の略字が「八」と「十」を縦に並べたような字であり、“八十”と読めることから由来しているようである。本来は、傘寿は数え年80歳のお祝いのため、満79歳を迎える年に祝っていたらしいが、しかし、今では誕生日に年齢を重ねるという考え方が一般的になってきているようである。

喜寿のときには、黄色や金色、金茶色のものをプレゼントする風習があると聞く。僕の喜寿の家庭祝賀のときには、「紫色の“帽子”と“ちゃんちゃんこ”を孫が着せてくれた」と、妻の由紀さんがいっている。が、僕は覚えていない。

今や100歳時代到来!? 平均寿命が延びている現代であっても、やはり80歳を過ぎても元気なのは、ありがたいことですよね。無理せず、今日一日を頑張ろう。

1971年8月7日 第3種郵便物認可(毎月6回 1の日・6の日発行)
2020年12月5日発行 SSKA 増刊通巻第10391号

SSKA ああるぴい

—◇ <編集後記> ◇—

令和2年はコロナで始まり、コロナで終わりそうな一年です。このような未曾有の体験は戦後初めてのことです。私たち原疾患を持っている人は用心しなければならぬと言われており、外出の機会がめっきりと減りましたが、それでは経済も立ちゆかないので早くコロナのワクチンと治療法が望まれる年末となりました。何事にも対処してゆく勇気も私は必要だと思えます。

会員・非会員の皆様には、何度となく「もうまく募金」にご協力をいただき、どうもありがとうございました。たくさんのご寄付をJRPS本部へと送らせていただきました。

今後ともご支援ご協力をよろしく願いいたします。

編集するにあたり、この会報誌作成に、多くの方にいろいろと原稿をお願いし、ご協力していただきました。誠にありがとうございました。

(河原 洋紀)

編集 加藤 多

.....
発行人: 特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会
東京都世田谷区祖師谷 3-1-17 ヴェルドウーラ祖師谷 102 号室

編集: JRPS三重会報編集部 河原洋紀

〒515-0847 松阪市岩内町614

(電話・FAX) 0598-58-2664

(E-mail) hk2664@aqua.ocn.ne.jp

定価200円